

景周が 江沼郡小鹽・橋立邊の海岸に遊んだ時のことを漢文で記したものである。

ヲシマ 雄島 鹿島郡太田の沖二軒許の所に在る。雌島と相並んで夫婦島と唱へられる。

ヲゼジュンリ 小瀬順理 通稱又四郎。號は木哉。字は信夫。小瀬甫庵道喜から三代に當るが、實は堀部養叔の二男で、二代甫庵の後を嗣いだもの。祿二百石、後に百石を加へた。初め前田綱紀順理に資を給して木下順庵に學ばしめ、後奥小將の士に教授し、五十川剛伯・室鳩巢と文壇に鼎立したが、元祿五十三十七歳で歿した。

ヲゼタクマタ 小瀬卓麻多 初名右内。天明元年養父五左衛門助信の遺知百五十石を繼ぎ、組外に班し、二年前田重教の近習に任ぜられ、四年八月五日罪を得て一類預となり、五年九月廿七日五ヶ山流刑の爲發足した。

ヲゼフクアン 小瀬復庵 諱は良正。字は順元。字を以て通稱とし、後復庵と改め、桃溪と號した。四代の祖坂井就安は小瀬甫庵の嫡男であつた。慶長十九年醫を以て前田利常に仕へ、二百石を受け、就安の子就安、その子泰順を経て復庵に至つた。是を以て復庵も初め坂井氏を稱したが、晩年小瀬氏に復した。復庵刀圭の術に精しく、屢俸を増して四百三十石に至り、又詩作に工みに、鳩巢・白石等の推賞する所となつた。享保三年八月十日江戸よりの歸路越後名立で歿。時に年五十。友人本保長益、復庵の遺詩を集めて良正集一卷を著し、その他に前田興盛傳記・木曾驛路記の著がある。

ヲゼホアン 小瀬甫庵 諱は道喜。初め池田勝入に仕へ、小瀬又四郎といふた。次いで

豊臣秀頼に仕へて長太夫といひ、秀頼生害の後土肥甫庵と稱し、堀尾帶刀の醫師となつた。帶刀歿して京都に浪居したが、寛永元年前田利常に召出されて二百五十石を受け、世子光高に軍法を傳へ、寛永十七年八月廿一日七十七歳を以て歿した。甫庵史に精しく、信長記・太閤記・天正軍記・董蒙先習等の著があつた。其の長子は坂井下總に養はれて、坂井就安といひ、慶長十九年別に利常に養する所となつた。甫庵の婿養子甫庵宗家を襲いだすが、それより八代卓麻多に至り天明四年罪を得て斷絶した。

ヲゼホアン 小瀬甫庵 復庵の孫。通稱甫元、後甫庵と改めた。諱は良顯。醫を以て十人扶持を受け、天明二年更に十人扶持を加へられた。甫庵は四溟と號し、詩を深山齋峰に學んだが、その作俳浮にして端正に乏しかつた。寛政元年歿。

ヲゾウ 尾添 能美郡白山下に屬する部落。白山遊覽圖記に、尾添村は白山大麓の西北に在つて、山趾に家があり、高きを南村とし、卑きを北村とする。戸約二百餘。前は溪に臨み後は山に據ると記する。古へは目附谷川を郡界としたから、尾添は石川郡味智郷に屬してゐたが、一向一揆の頃から能美郡に隸し、寛文八年幕府領に歸した後、白山麓と稱して郡名を冠せぬこととし、明治五年再び石川縣能美郡の管轄とした。

ヲゾウオンセン 尾添温泉 能美・石川二郡の境界なる尾添川の上流中、川を遡り、その南方より入る湯谷川の右岸海拔九五〇米の地に在つて、能美郡に屬する。寶永三年の書上に、『尾添村湯之儀、百三十年許以

前、能美郡別宮村居住竹次右衛門殿と申仁、見立候而被致入湯候處に、次右衛門殿越後に所替に付、退轉仕申由申候。勿論由緒等も無御座候。』とある。尾添温泉とは、寛文八年以前に中宮温泉を指してゐたこともあるが、前の書上には別に中宮湯を擧げてあるから、それとは違ふ。この尾添温泉は、大正十年に郡長松本源祐が岩間温泉の名を與へたものである。地圖に之を溪流の左岸に描いてあるのは右岸の誤である。

ヲゾウガハ 尾添川 源を大汝岳北方から發し、北流して地獄谷の溪流となり、次いで中、川となつて西北に流れ、約十軒にして山毛櫛尾山の南麓に至り、南方から來る丸石谷の長溪流を容れ、又東方から來る蛇谷川を合するに及んで尾添川と稱せられる。丸石谷川の上流には千仞ヶ瀧(地圖百四丈、瀧)がある。蛇谷川は源を石川郡の東南端なる妙法山西南に發し、北流すること約四軒で瓢箪山に源を發する瓢箪谷川を東から入れ、西北に進んで親谷の溪流を西南から受け、更に岩底谷の溪流を合はせて中宮温泉に至り、又西流して中、川に合し、前記の尾添川となり、遂に石川郡木滑新で本流牛首川と合して手取川となる。こゝに至るまでの全長二五軒。

ヲゾウギンザン 尾添銀山 能美郡尾添に銀山のあつたことは、寛文六年の文書に『尾添村に最前は銀山就有之、小屋掛鉢の町御座候。唯今銀山致退轉、町屋も無之候。』とあるによつて知られる。

ヲゾウハラ 尾添原 能美郡尾添から白山への登路に在り、又尾添野とも稱する。白山遊覽圖記にいふ。尾添原は宮坂の南、同行坂の下に在る。沃壤種うべく、東方地稍卑くして層々五盤をなし、每盤に田がある。

ヲダケ 小竹 鹿島郡久江保に屬する部落。ヲダケガハ 小竹川 鹿島郡小竹の山間から發し、小竹を經、西北流して長曾川に注ぐ。

ヲダケジョウ 小竹城 鹿島郡小竹なる八ヶ平の麓に在つて、館又は御林と稱する地是である。温井景隆・三宅長盛の長連龍と争うた時、景隆等は成田武安をして守らしめたが、天正八年六月連龍は菱脇の戦に勝ち、尋いで小竹堡を奪うたことがある。

ヲダケセンザエモン 小竹千左衛門 初め直助・政助・政右衛門。御算用者で年寄中席執筆を勤め、天明六年小頭並に進みて新知六十石を受け、寛政三年二十石を加へて組外に列し、十三年又三十石、文化三年五十石を増し、九年二月八日歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

ヲタニ 雄谷 白山に在つて、或は男谷とも書く。尾添口登山路なる龍ヶ馬場の北に源を發し、岨清水の山脚を緩流して瀧川となり、次いで千仞ヶ瀧(地圖百四丈、瀧)を落せしめ、丸石川となつて中、川に注ぐ。白山遊覽圖記には雄谷を雄溪と書いてゐる。

ヲタニ 雄谷 石川郡笈岳の西方清水谷と水晶谷との溪流が合して雄谷の水となるもので、その下尾添川に注ぐ。

ヲダヒラ 尾平 白山の舊市、瀬温泉からの登路中、天井壁を越え五輪坂の次に在つて、標高一六〇〇米許の小平地である。

ヲダヤ 小田屋 鳳至郡南志見郷に屬する部落。能登名跡志に『總じて此邊を南志見と郷名を呼ぶ也。商家・酒屋などあり。よき村也。』とある。